

『戦争と検閲—石川達三を読み直す』を読む

「戦争法制」の国会審議から強行採決へと進む中で、本書を手にして戦争というものを身近かに感じつつ読み進んだ。著者は朝日新聞記者であり、多くの著作に励んできた河原理子さんである。

表紙カバー裏から「生きている兵隊」で発禁処分を受けた達三。その裁判では何が問われたのか。また、戦後のGHQの検閲で問われたこととは？ 公判資料や本人の日記、幻の原稿など貴重な資料を多数駆使して、言論統制の時代の実像に迫る。取材し報道することの意味を問い続けて来た著者が抑えがたい自らの問いを発しながら綴る入魂の一冊。

「はじめに」から紹介しよう。石川達三の名を文学史に残したものは、少なくとも三つある。一つは、第一回芥川賞受賞者であること。受賞作は東北の農民たちとともにブラジル移民船に乗り込み、その体験をもとに書いた「蒼氓」である。二つ目は、ベストセラーをいくつも生み出したこと。戦後の新聞連載小説の旗手だった。愛読したことがある「人間の壁」は、1957年から59年まで593回にわたって朝日新聞で連載された。そして、三つ目。「筆禍事件」によって、彼の名は歴史に刻まれることになった。これがこの本の本題である。

日中戦争当時、新進気鋭の芥川賞作家だった達三は、総合雑誌『中央公論』の特派員として中国へ渡った。内地では「南京陥落」を提灯行列で祝っていた1937年の暮れのことである。年明けに上海や南京で日本兵らを取材。帰国して一気に書き上げた長篇小説「生きている兵隊」は、『中央公論』1938年3月号の目玉になるはずだった。「生きている兵隊」は、中国北部から南京に転戦するある部隊を描いていた。教師や僧侶や医学者だった日本兵が、戦地の現実に自分をなじませ、あるいは破綻していく様子をつづった長篇だ。老婆からの掠奪、女性殺害、慰安所、錯乱した日本兵の発砲事件などの場面もあり、このままでは検閲に通らないと判断した編集部の手で、まず、〈他の兵も各々……まくった〉などと意味不明になるほど伏字をほどこされた。全12章のうち最後の2章を削除して、代わりに末尾に〈-----〉を2行置いた。

それでも、雑誌の発売前夜、内務省により発売頒布禁止処分、いわゆる発禁処分にされた。さらに、達三と、『中央公論』の編集長や発行人が、警視庁の取り調べを受け、「安寧秩序を紊乱」したとして新聞紙法違反の罪で刑事裁判にかけられ、有罪判決を受けたのだ。

本書第1章「筆禍に問われて」で経緯などが詳細に紹介され、第2章「XXさ行きてくねえ」、第3章「戦争末期の報国」、第4章「敗戦と自由」へと続く。「戦争」の二文字が話題になる今の時代に、本書から多くのことを学んだ。「生きている兵隊」もぜひ読んでみたい。

(2015年7月29日)

